
きみのかおりと、

みまん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみのかおりと、

【Nコード】

N5591F

【作者名】

みまん

【あらすじ】

僕と彼女のちよっぴり甘めな日常です。『きみのかおり。』を読んで、拒否反応が出なかったかたは是非どうぞ。不定期更新。

ぶろろーぐ。(前書き)

前作『きみのかおり』の僕と彼女のお話です。でも読まなくても大丈夫だと思えますよお。

ぶろろーぐ。

突然だが僕は、

「うあ……っ」

普通の、

「……ひいや……っ！？」

そんじょそこらに、

「いや……っ！？」

ごろごろいるような、

「ほんと……に……！」

少年である。

「やめなさあいつ……！……！？」

ぼくのあせり。

「なんで？」

にやり、と笑った彼女はやっと僕のふくらはぎから指を離れた。

「なんでじゃあ…、ありません…」

はあはあ、と肩で息してる、こっちが僕。

ちなみにここは彼女の部屋の2段ベッドの上の階。
彼女の寢床だ。

「…あんなに嬉しそうだったのに……」

彼女は相変わらずニヤニヤしている。いやニタニタ、かな？

「誰も…っ、嬉しそうになんか…」

してない。

といいかけたのに息のあがっている僕の肺は言うことを聞かなくて、

「じほっ！！？」

派手にムセた。

「大丈夫！？」

すぐに心配してくれる彼女。

僕はこくこく頷きながらむせこんでいた。

彼女がとんとんとん、と僕の背中を叩く。
なんだか安心した気分になって、肺のほうも落ち着いてきたみたいだ。

「…ありがとう」

うつむいていた顔をあげ、彼女に礼を言う。
彼女はうつむいてふう、とため息をついた。

「心配…した？」

彼女に聞いてみる。

彼女は1回頷いたが、うつむいたままだった。

さっきまでのテンションはどこにいったのだろう。

しょんぼりとした彼女は、いつもより小さく見えた。

「…よしよし」

彼女の頭に手をのせる。

そのあと彼女の髪をわしゃわしゃとやった。

広がる、彼女の香り。

いい匂いだな、なんて和んでいたら、彼女にのせていた手をおろされてしまった。

僕の右手は彼女のひざへ。

彼女は僕の右手首をつかんだまま、僕によたれかかってきた。

ばすつ、と音がして、彼女が僕の胸におさまる。

ふわり、と僕を彼女の香りがつつんだ。

彼女の左手が僕の右手首を離れて、僕の腰に回った。右手はそろそろ僕の背中をいじっている。

その右手が動くのを止め、ぎゅっ、と抱きしめられる。

「…ごめんね……」

彼女が呟いた。

「なにが？」

彼女の頭が僕の肩にのる。しっかりと、彼女の重みがした。

「あんなこと…、しなければ……」

あんなこと。

冒頭の僕の全身をいじり倒したあれのことだろうか。

彼女は天性のサディストらしく、僕の弱いところ ふくらはぎや、ふとももの裏、脇腹などをくすぐったときにでる僕のエロボイス

（彼女談）が好物らしいのだ。

正直僕もあれには困っているのだ。でも、

「…ごめん、なさい……」

そんな弱々しい声で謝られたら、許すしかないじゃないか…!!??

「……許して、くれないよね……」

「いや!? そのっ……」

「ん？」

彼女が肩の上で首を傾げる。

彼女の髪が首に触れてびくっ、としてしまう自分が悲しい…。

「別に…いいよ……?」

びくびくしたまま彼女に言う。

彼女はもう一度、僕をぎゅっと抱きしめて、

「っあ…!!?」

僕の首をひと舐めした。

「ふっふっふ。騙されたねマゾヒストくん」

僕の体を離れたサディストは僕の前で高らかに笑った。

「…僕は別にマゾじゃない」

「言葉のアヤだよ」

彼女は愉快そうに笑うが、僕はぜんぜん愉快じゃない。

「さあ、そこに寝転がって?」

彼女は僕の右側に移動してきて、さあさあ!と僕を促している。

騙されたね。

と言っているところを見ると、先ほどの弱々しいのは演技だったの
だろうか。

まあ、よくあることっちゃあよくあることなのであまり気にしない
でおう。

そこも僕が好きなところだ。

枕やら布団やらを脇によせてうつ伏せになった。

「ん。いいこだねえ」

満足そうに彼女は僕の頭を撫でた。

「で、何?」

「何って」

そう言うと彼女は僕のふくらはぎを露出させて、

「つーづーきつ」

人差し指でつつつ、となぞった。

「ひゃ……っ!？」

びくん、と体が跳ねる。

背筋をぞくぞくと何かがのぼってきて、僕の視界を真っ白にした。

「ちょっと待って!？」

「なんで？」

足首からのぼってきた人差し指は、またつつつ、と足首の方へ戻っていく。

僕はそれをぐつと堪えた。

タイムタイム、と両手でTの字を作る。

「なんで続き!?!前にもダメって言ったでしょ!？」

「だっていいよっていったもん」

ぷー、と彼女は頬を膨らませている。

ちなみに僕は腰から右側に曲がって彼女を見ている。
結構ムリな姿勢だ。

「…いつ？」

「さつき」

…さつき……。

そんなこと、許可しただろうか。

「別にいいよ、って」

別にいいよ…。

……さつき許したときに言った言葉だ！

「違う！あれは…」

「『あんなことしなければよかったね。ごめんね』に『別にいいよ』って答えたんだから、別にやってもいいんですよ？」

にたあつ、と笑う彼女。

「そういう風にもとれるかもだけど！」

焦る僕。

「そういう風にとったから！」

「んむ！？」

口をふさがれて、曲げていた腰をもとの位置に戻される。

「うへへー」

「むー！ん…っ！？」

わざとらしく笑う彼女。

今度はふとももの裏側。

体は跳ねてふともものを彼女のいない側　つまり左側　に隠した。
口をふさいでいた手もいまの弾みでとれた。

僕は彼女のほうをむいて、横向きに寝ている。

すると彼女の手が僕のお腹にのびてきた。

やばい、と思った瞬間だった。

「えいつ」

彼女は僕のお腹を露出させてにんまりとした。

奥の方にある左手の人差し指がなんだか卑猥にみえますよ、お嬢さん…。

「ダメ！お腹はホント弱いから！！」

必死に両手で隠したが、

彼女の両手にかっちりとつかまれ、ベッドに押さえつけられた。

仰向けになった僕のふともものあたりに彼女が陣取っている。

両手が自由にならなければくすぐられないと思い、自分の両手に逃げられないギリギリの力をかけた。

これではらくたては諦めるだろうと、彼女をみた。

相変わらずニヤニヤしている。

何故だろうと思っていたら、彼女のあごが僕のお腹にのった。

あごじゃさすがにくすぐったくないぞ、と言ってやろうとしたら、

「べ
」

彼女は舌をだして笑っていた。

まさか。

舐めるつもりじゃ…。

「きつと気持ちイイよ?」

彼女はえへっ、といったかんじで笑って僕の顔から目を反らした。

「…い…っ。…いやっ…!ダメ!!」

僕の視界はぶっ飛んだ。

「いやああああっ!!?」

正直、あのあとどうやって家に帰ってきたのか、まったく記憶にない。

あの日の彼女は、
血に飢えた野獣だった。

ぼくのあせり。(後書き)

というわけで、第1話でした。ちょっとコメディー色が強くなりすぎてしまったので、次回からは気をつけていきたいですね。それでは、読んでくださってありがとうございます。

おうじさま。

彼女のおでこに自分のおでこを軽くぶつけた。

これが僕なりの愛情表現だ。

そのあと彼女を抱きしめて、彼女の頬に自分の頬をつけた。
ひんやりとした彼女の頬は、かなり気持ちがいい。

そして僕の鼻をくすぐるのは、僕の大好きな彼女の匂い。

鼻で大きく息を吸う。

いかん、過呼吸になりそうだ…。

「どうしたの？」

彼女の頬が動く。

僕は彼女の耳に息を吹きかけるように言う。

「好きだ」

彼女の体がぴくんと跳ねて、甘い声が漏れる。

珍しい。

彼女はこういう刺激には強い人なのに…。

僕は肺がいっぱいになるように彼女の香りを吸って、ゆるゆると彼女の耳に吹きかけた。

「…やつ……」

可愛い。

僕は彼女の肩に両手を置くと、頬に軽くキスをしてそのまま後ろに寝転がった。

今日は彼女のベッドではなくて彼女の部屋のごわごわのじゅうたんの床なので、寝心地はあまり良いとはいえない。

ちなみに、僕は今の一連の作業をするだけでかなり精一杯である。

力加減が難しいのだ。

ドキドキや戸惑いに敗けっぱなしだとキスもできないし、だからといって、本能の手綱を手放してしまえば何をしでかすかわからない。

僕はそんなヤツだ。

「…ねえ？」

いつの間にか僕の隣に寝転がっていた彼女に言う。

「好きだよ」

彼女はこれもまた珍しく、照れるような身振りをして僕に顔を押し付けた。

「…うるさい」

彼女がぼそつと言ったので、僕は

「ごめんね」と謝って彼女の頭を撫でた。

「…ゆるす」

「ありがとう」

彼女の頭を優しく二回叩いて手を離れた。

今日の彼女は可愛い。

…まあ、いつも思っていることなのだが。

僕は自分に呆れて口の端で少し笑った。自分が少し気持ち悪かった。いつもなら僕の体のいたるところをつついてくる彼女もおとなしいし、今日はわりと平和な感じだ。

目を閉じた。

僕の心臓の音と時計の秒針の刻まれる音、そして彼女の寝息。

「…寝るの早すぎませんかねえ？」

僕の呟きが聞こえるわけもなく、彼女の幸せそうな寝息はリズムを崩さない。

ちょっとむかついたので、

「えいつ」

彼女の頬をつついてみた。

「…むー…？」

彼女は顔をしかめて、少し下を向いた。

僕はどうすればいいのだろうか。

起き上がってみようとしたが、彼女に腕をつかまれていた。

突然だが、彼女には特殊能力がある。

彼女の隣に座っていると、ものすごく眠たくなるのだ。

彼女が眠っていたり、自分が寝転がっていたりすると完璧にその能力の餌食だ。

彼女の前で眠るのはとても危険なことのよう感じる。

僕の眠りは結局深いので、彼女のくすぐりではおそらく起きないだろう。

でも体は反応するだろうから、僕の

「エロボイス」が好物の彼女には絶好のエロボイス日和になるだろう。

……かなりぞっとする……。

と、いうわけで。

「起きてくれー…」

僕は彼女をゆさゆさしてみることにした。

ちなみに、腕から無理やり離れたぐらいでは、彼女は起きなかった。

「…んー…？」

彼女の手がぴくんと動いた。

意外と寝起きは悪くないようだ。

瞳がゆっくりと開く。

僕は彼女の顔の両横に手をついて、上半身だけ覆い被さるようにして彼女の様子を見ていた。

瞳が完全に開いた。

僕の方を不思議そうに見た後に、頭を少し動かして頭上の時計を見て、また僕の方を見た。

両手が動きだした。

彼女は目をこするとその両手を目の前に伸ばし始めた。

目の前つてのは僕の方ってこと。

「どうした？」と口を開こうとしたら、彼女の両手が僕の両頬に触れた。

眠たそうな瞳が再び閉じられる。

ぐいと僕の頭は彼女の唇に引き寄せられた。

「んっ!？」

僕はとつさに目を閉じた。

彼女は僕のおでこにキスをして、僕の頭を解放してくれた。

「お…、おきた？」

僕がびくびくした声で聞くと、彼女は眠そうにこくこくと頷いた。

僕はふうと息をついて起き上がった。

彼女は僕の服を引っ張って起き上がってきた。

「ねーねー」

彼女が僕を呼ぶ。

僕が彼女の方を向くと、

「うむっ!？」

そのままキスされた。

今度はしっかり唇に。

前言撤回。

寝起きは最悪だ。

驚いた僕が抵抗すると、彼女はすぐに僕を解放してくれた。

「おはよ」

彼女はいつものにやっとした笑顔を浮かべて言う。
僕は額に手をあてて息をついた。

「おはようございます、キス泥棒の白雪姫」

「生憎りんごは食べてないなあ」

「じゃあ、眠り姫ですかねえ」

くすりと彼女が笑った。

「ずいぶんとキスの苦手な王子さまですこと」

僕は彼女にデコピンをくらわせた。

彼女は小さく声をあげたけど、懲りずに僕に言う。

「大好きだよ、王子さま。キスがヘタでもね」

「るっさい」

にらみつけてみたけど、彼女があんまり可愛らしく笑ったので、少しひるんでしまった。

しょうがない。

今回だけは許してやるか。
珍しいものも見られたし。

「……好きだよ……同じくらい……」

……今回だけだから!!

しんじくん。(前書き)

あけました。おめでとうございます。今年もよろしくお願い致しますねー。なんだかマニュアル通りって感じで申し訳ないですが…。
お話のほう、楽しんでいただけたら光栄です。

しんじくん。

時間は刻々と過ぎていく。

「この時計、進むの速いんじゃない？」

僕の真剣な疑問に彼女は、まさかあ、と答えた。

ベッドの上で彼女の目覚まし時計とにらめっこしてみたが、秒針のスピードと僕の心臓のスピードは同じぐらいだったからため息をついた。

「ですよねえ……」

僕は諦めて目覚まし時計を元の場所に戻して、彼女の枕を持ってベッドをおりた。

「でもさ」

おりてきた僕を右手でちよいちよいと呼んで、彼女がいった。

僕は枕をぎゅっと抱いて彼女の前に座る。

「楽しい時間って早く過ぎるよね」

僕は相槌を打って枕に鼻をうずめた。

彼女はやけにニコニコしている。

だから僕は彼女に好きだよ、と言ってみた。

彼女は知ってるし、と笑って僕の頬をぷにぷにとした。

「相対性理論：みたいな？」

彼女は掛けてもないメガネを上げる仕草をしながらインテリぶって言った。

それ、アインシュタインが言った有名な喩えで、実際はそれと相対性理論は違うんでしょ？

言おうかと思っただけど、彼女の機嫌を損ねるのはいやだったのでやめた。

かわりに、彼女の頭をなでなでした。

彼女は猫みたいに目を細めて、今にもごろごろと喉を鳴らし出しそうだった。

口では言っただけど。

なでなでしながら枕の匂いを肺いっぱい吸い込んだ。

少し粉っぽいような不快な埃の臭いをかきけすように彼女の匂いは僕のなかを埋め尽くす。

口で大きく息をはいて幸せってこついうことだね、と言ったらごろごろ言っていた彼女に笑われた。

「やつすい幸せだね」

「そんなことない。なにものにも代えがたい極上の幸せだよ」

彼女をじつと睨み付けて言ったらそーなんだ…、と苦笑い。

ヤバイ、引かせたかな…？

まあ、いいか。

いつもは僕が引かされてるし。おあいこでしょ。

と、よくわからない理屈で自分を納得させて僕はピアノの前に座った。

彼女の部屋にはピアノがある。

正確には、彼女と彼女の弟の部屋にはアップライトピアノがある、だが。

僕はピアノのふたを開いて鍵盤の上に乗っているなんともいえない赤紫の長いフェルトを四つ折りにして椅子の上においた。

椅子は少し高いけれど、いじるのもめんどくさいし低いよりはましだからこのままでいいだろう。

白い鍵盤に人差し指を落とす。

ド、の音。

澄みきったその音は穢れた僕らを責めるようにもきこえた。

僕だけだと、いいけど。

鍵盤から一旦手を離してピアノの一番右のペダルをガタガタと踏んだ。

ちゃんと沈むのを確認して鍵盤に少し爪ののびた指をおく。

ペダルを踏み込んで鍵盤を優しく弾いた。

ドとミとソの音。

弱々しくアタックをしたCのコードは、ペダルの力を借りて部屋中にふぁんと広がって意外とすぐにきこえなくなった。

「へたくそ」

隣に立っていた彼女はくすりと笑った。

どうみても切りすぎの爪の指が鍵盤に落ちた。

僕は何か弾いてくれるのかと少しわくわくしたが彼女は2、3個長調の和音を弾いて僕のほうにむきなおった。

彼女を見上げると自慢気な笑顔をこちらにむけていた。

「…なに」

「なんにも」

彼女が僕の頭を乱暴に撫でて僕の脳みそを揺らした。

「くらくらするし…」

僕は呟いてイスからおりてピアノを片付けた。
彼女にはまたの機会に弾いてもらおう。

「ねえ」

彼女は返事をする。

僕は彼女の返事を聞いてから彼女に抱きついた。

「…ん。どしたの？」

彼女が訊いてきたけど僕は軽く首を左右に振っただけだった。

彼女の胸に顔をうずめた。

ふわふわと僕を包みこんでくれる気がして僕は目を閉じた。

「…よしよし」

ぼんぼん、と彼女の手が僕の背中をさすった。

僕は彼女を少しだけ強く抱き締めた。

かちゃ、とドアノブの回る音がした。

「!？」

瞬間、僕は彼女から突き飛ばされごわごわのじゅうたんの床に転がった。

先ほどまで夢見心地だった頭では今の状況をうまく飲み込めなかった。

とりあえず床から起き上がった。

「あ…」

ドアを開けたのは彼女の弟だった。
気まずそうにこちらを見ている気がする。
僕の被害妄想だろうか。

「…こんにちは」

「久しぶり」

彼女の弟は僕と挨拶を交わすとじゃあ、といってドアを閉めた。
リビングにでもいったのだろうか。

「っはあ…。びっくりしたあ…」

「それはこっちの台詞です」

冷静なように繕っていたが僕の心臓は周りに音が聞こえるんじゃない、
というぐらいたくはくしていたのだ。

「じゃ、帰るわ。シンくんにも悪いし…」

なにを考えてるのかわからない彼女にいう。

彼女は僕が自発的に帰ると言ったときはだいたい止めないのだ。

「あ、そうじゃ玄関まで」

僕たちは部屋を出た。

スニーカーをしっかりと履いて自転車の鍵をポッケからだして彼女
にバイバイを言った。

「うんじゃねー」

玄関のドアに手をかけてもう一度振り返った。

なぜか偶然あった『彼』の目はやっぱり僕らのことを、なんだかぎ
こちなく見ているように思えてしょうがなかった。

気のせいだと、いいな。

ばれんたいん。(前書き)

しばらくぶりです。遅くなりましたがバレンタイン話です。誤字・脱字等ありましたらお伝えください。では、ごゆっくり。

ばれんたいん。

「バレンタインデー……か……。」

ふう。

僕はため息をついた。

正確にはバレンタインデーだった、だが…。

彼女はどこに行ってしまったのだろうか。

彼女のことだから、そんなことすっかり忘れて、ゲームしたり真面目に勉強したりしているのかもしれない。

…別に欲しかった訳じゃない。

……断じて。

確かに甘いものとか好きだし、チョコレートなんて本当にこの上ないぐらい好きな部類にはいるし、いつも部屋にはチョコ置いてあるし、貰えたら少しくらいは嬉しいかなあゝなんて思うけど…！

……言ってて虚しくなってきたよ…。

はあああ。

深めにため息をつく。

気分転換に近所のスーパーにでもいこう。

スーパーがいい。

コンビニはちょっと高めなバレンタインにあげる用のチョコが置いてあって僕に買って欲しそうにじっと見つめてくるに違いないからだ。

近所のスーパーで、白いダースとチョコチップクッキーとそれからミルクティーを買おう。

それを食べながら、独り寂しくテレビのバラエティーでも見ようじゃないか。

可でもなく不可でもないようなトレーナーのうえに、よくわからないもこもこしたジャンパーを羽織る。

僕は彼女と違って、ファッションとかにあまりこだわりがないから、詳しい名称とかは解らない。

まあ、わからなさすぎだけども。

ジャンパーのポケットに財布を突っ込んで自転車のカギをひつつかむ。

おっと。

テレビとストーブも消して…。

戸締まりを確認…っと。

僕は自転車に跨がって家を出た。

がしゃん。

自転車の鍵をかけて、カゴからスーパーの袋を取り出した。

バレンタインデーが過ぎたせいなのか、白いダースはいつもよりかなり安い値で売られていて、予定より多く買って来てしまった。

すこし重めのそれをぶらぶらさせながらポストを覗く。

無理矢理曲げて入れられているダイレクトメールを引っ張り出してポストを閉じようとした。

あれ。

ダイレクトメールが居なくなつてすこし広くなったポスト内には、電気料金の明細書とすこし膨らんだ紙袋が。

僕はそれらを引いたくするようにして、出ていくときに鍵をしめわすれた玄関のドアを開けた。

どたばたとリビングに入り、自分を落ち着けるためにもと、ストーブとテレビを付けた。

ふう。

一つ息をはいた。

ダイレクトメールをダイニングテーブルに半ば叩きつけるようにして置いて、電源の入っていない炬燵に入る。

白いダースたちは炬燵の上で待機だ。

茶色いどこにでもありそうな紙袋はすこしだけチョコの匂いを漂わせていて、僕はにやついた笑顔になる。

中を覗いてみた。

チョコケーキと白い画用紙。

チョコケーキは見えて分かるぐらいしつとりとした出来栄で紙袋のマチぎりぎりの横幅だ。

きっと僕がこつこつこのを好きだとわかっているんだろう。

これだけあれば満足できそうだ。

そして、白い画用紙。

手のひらよりすこし大きめのそれは二つ折りにしてあって上面には

青い水性のボールペンでなにか書いてある。

… 英語の筆記体。

おそらく『ハッピーバレンタイン』。

見慣れた彼女の優しい文字。

この青い水性ボールペンは最近の彼女のお気に入りであることに使っているものだ。

中を開くとシンプルだが可愛らしくシックなハートや黒ネコのシールがセンスよく貼られていて、彼女らしいなあなんて笑ってしまった。

シールと文字は下半分にのみ。

『遅くなってごめんなさい』

チョコケーキです

うまくできたから感謝してたべるんだぞ

なんてね（笑

ホントはちゃんと当日にできてたんだよ！

ただにーさまとーさまが食べちゃって…（・・・）

でも2回目だから味はバッチリ！

… のハズ…（苦笑

ホワイトデーは3倍返したよ！！

楽しみにしてるから
』

なんか…泣きそうだわ……。

持っていくのを忘れていた携帯には僕が家に居ないこと責める彼女からのメールが入っていて。

『ごめん。

ありがとう。

愛してる。』

送信ボタンを押して、ケーキにかぶりついた。

恥ずかしいから、彼女からの返事の内容はあまり考えたくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5591f/>

きみのかおりと、

2010年10月12日08時16分発行